

佩詒古今考
再撰五言式

三一四

~5
922
3

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 1 2 3 4 5 6

JAPAN

Tajima

再撰貞子式

月之二

卷之二

下
司川齋書

せんじくみあひ寝ててまくの寝様す
いやの妻がおはづりて大和音をすとおれ
い代の事を撰集すとあると都さりとす
あけむと連うれ西から詠ばすちがふる
よきの内とおもひかへもとえりのみ
いもあらんとお家がよし詠とひとおもひ
みゆかへしなおおきのまくわなと

始と之は詠歌所作の名詞にして考の事す
姿はあき前と例の詞とあると云ふが此
他にむち妻とて有りておもふ事ある
「妻とは萬の夫なる一を妻とて有る
まことわゆる物の情りあるうらうめ可い
時とぞうへて妻とて又は夫とて有り
まことに妻とて詠歌とて是を下第と
附くとあらうて句あらうてことと能ふ
ハシテも設けはや能活の活撥ちうひく
連て考れ豊詞と敵てくほの事とほり

こよれにそひ揚起うきをかねれおいて
まつまうからせかくはく（もさみのさう）あとも
ちうと今能活（妻）がうがうめくと
おのじくあらの詞とあへて連句のまちうめ
あらうて能活と例のま訴えますをア
の直（ま）きからせきくしやくちとせがくらうん
せれとけたれども歌詩の部詩の事（まこと）と云ふ
あんほくくい妻の事（まこと）と能活（能活）が詩

トて能行（能行）對て能（能）でするや
事を云（い）再接（なうせつ）に妻の一條（ひだ）あります

「おのをつまらぬちととく月のやうせんと
あ跡のふじと軒にとまつまきの山と重
いづくをやかくらゆせんとてと
傳やまとよし森と山のやうり率也川よ
とさとるがゆめあひあひとされりわく作
よひの山と山とあたとせのせりと
よひはとと妻のゆめととすとせ
ゆゑをうりあうりをとせうりうり
丁をうりゆめの門えよ起れども空ひま
て事あまうとがくまう仕め西

○季節の跨る物語

もくじまがの物之叶木多比良山秋山

かうりの道遙あれと川おもとみとせひ
せぬとよめはく うややかなものと
喜びの橋のりひいむし船と音あそひ
ありてまつてまつ秋の川まくはれ川
まくでえ秋の用あん古說よりおもと
ぬもて野花留へるすれもものひとせ
喜びの橋とせ説められと例能作の葉うり詠と
車とよもじり花とさくおと花と詠とく
秋はなむきつてまつめの花とあるとまれ
宿作の次もとえにかねて花やまつ秋の一ま

室を二十一日とまわらひとまよあひとれど
能作のねあとて次の落と信と一はて川おの
冬ふる物。爾とこませ用ありて船の事と
もうてあるの事とてうるおとれと物舟と
のあせまでもあるとてうると秋とせまよだ
うる御とゆきの詠とてうるまよのふれが
のうへくよーねお家旅とてうの用詠
とくやれとくとくおのとまよほるお[△]オ[△]よ
あかと一句もあれてと新とくまよ用
あれの名とがよあれと新供とせばよ

れ和の二用ありて能詠よりとて各月あれど季
とはれてとこままで用一トニこままで走草葉
とすや節供のる事すとあはせよまた秋ハ桂物
のま姫おゆく薔薇まとてとつるてかわん
えれと東然のくわとつー事と歟と薔薇の
えまた古のえ季子へ句論とて薔薇と上下
の季子ととづり歎みてみとらばとらひむる
とらひ詰るといひてまた秋の差ぶがあれとくせ
者ほよづる時をこひじてつわこ季
用いよしれよやのえよよよよおと冬と雪

のれゑれとづれとくまませ冬月とせきて西季子せ
差ふとあそりきうちられとみのくよすらうり
秋とあうはシツアとそとそとあうはアと詠社の临时
の季子と名月ありとあれやとかにとよみふ
比用さるや貴賤とくらり寒と暑とくらり礼と
はもと和とあきとひて節供節月のまつりと他備
と多用されぐふくに世の裏議となまく射
他譜の用ぢりとやあられく射のてまともと射を
えとまされとそとみうよ名月もむく當時

の近やうはまへてまたは尾とひしをとひ
者にて金とひしをとひしをまのきをのき
内に寝かせられねばよとせんとお宿と
車とすと旅するかとすとあくまゆと
会とあくまゆとけんとひがとくと
村とくらふの堵壁も草庵の仕入ともと
かやうせえまわらわうらわうをとあくと
六角とひかれひざめにとくとくと
夜とくとくとくとくとくとくとくと
せひかくとくとくとくとくとくとくと
秋を拂ひとくとくとくとくとくとくとく

やまとつじやまとつじやまと秋あくらと一説
みに押おとるゝとされとるあれへ秋もよ
苦やれやれとくせめのるまくとくとくと
苦あることなあうとくせめの苦とおこり
て秋のやもとくらへーあがきくちうくら
かー和えくはーきくへとまくらえをく
くられつがたまくらのやくととすゆ幸
くらくらすくらすくらすくらすくらすく
くらすくらすくらすくらすくらすくらすく
くらすくらすくらすくらすくらすくらすく
くらすくらすくらすくらすくらすくらすく

ニ用ありて能活よしと名曰ひれへいの寳
徳とがくのとく一世の寳譲と竊りておほ
をとをすよりひきや冬をとむとく新製
あり。今梅もらに古はより給まし體ものひ歎と
ソシ筋キとひをあといをすとすれと一句をあれ
まよ时ハ五とえとれ各同トテ全式とせと通
也ふれとよけれとニ。また三季四季とれと常使
と新とぞと古例よりて一句をあれある時と
同季すと向去とゆきとまやみ向はとくわに又
ひりて二句はとととと向去とをわせ。○雅接もるに

者には序よりある。ととしへ掛。ととしへ川持。とよ遊で
和歌連寄。古はとあると能活よ今ホの寳譲
あれひげにと筆供の例とかつて一引とまれてある
時は彼と親とかと一毛ひうふと二句去をか倫
あんまくへ多とすまに二京、能活よ多用あれと云
冬をたはらるるすとてお嬢と二句と一毛も
片らく一臣の用と絆せんけ式へおゆく新削よ似られ
と全く古の例あるとあるとちくは二種の
寳譲より一世の寳譲と竊ひて用ひと用さる
と例よそ人の様意よどき

○
季節とあわせ新しくある物を書く

むうとう連記のまゝに序せよせおのとある
おとく一をとく一をまとひも同をまへきとく
又句をあらざりされとぞとせば今より句
の書とあら財も抑へじむと今より能潜のまゝ秋と
角のを句もとよえひきとこ句もとよえひき
て名月の輝重と論をほに發りよりよとふへまると
ありて至句よとれい新とちるわありおとえ名
のとゆに○また其の事と説ありテとまことに事

よあみあくまほすゑの御とえすて朝の葉を
えもれどいゆきの葉トカム雪てえぢれとゆめ
は葉へ新ちりとくとくとくとくとくとくとく
らす川とも葉とがれてゆる葉とがれてゆる葉
かくら新葉とがれてゆる葉とがれてゆる葉
よゆきとがれてゆる葉とがれてゆる葉
よゆきとがれてゆる葉とがれてゆる葉
あれとがれてゆる葉とがれてゆる葉
あれとがれてゆる葉とがれてゆる葉

と新と云ふも新とぞとぬ角○えと朝日せ
風爐より拾草し拾爾周爾風炉中もむまとと火と
あへて古物よりえとるまれとそれとそのは涼と称され
ハモ詠も又えと古物も併と新とぞとれと
ち多段角口とモウトモト船底のま詰あれ
えれと兩用のホーとひじ火猪牛アニキモナラ
テモ盛の對あれハモナリ新ノモ用モセ○秋を
灯籠とつひ初アモキナリ新ノモ用モ一燈湯
毛威放生とモ秋ナリモアリて乞と放シヒ

例の二用とんもうに御遊と子詠ハモトモ火猪
の名おもくまの新ヒ向備アモ秋の季
ニ用ひるふと例の實詳アモヤ○そと
用猪裏「う切火」也アモルと古物もおふと
アモ貢富の兩用ヨア時ヒ臣もお方もかくる
ま木柵ヒサツトモ代の赤ヒミ食衣辟子ヒ向備
ヨリクレヒモテ御足御脚御踏皮御やのあも清ア用
アモモモセ古物ヒ御とタヒシカモカモ御帽子
アモシ難よモモアヘ用アヒモアヘえとモ一束ヒ

肺と相ゆる氣血の運と見るわあれハ可也えど
某湯あると物は新舊のめりてより新舊も可也時
もあん例の同季まとぞむしとぞそれをば笑
の虚實と云ふや。今梅ももたに臘の氣れとま秋
ハ例のこゑ句ははてよすがの用とさとばに
あんええをとおなうく一日ちるにそとへ草人の
扇一叶ととく老人と扇風よ弱あくととくも
よちおひ姿情の用とすととくとさと各日と効
取とよとよせ言うちる日あゆふとく
コモ用とぞへりとももとあうとくわすらうある

五セキミトヒモト句とモキモとソラモソトカクモ
右法の五句まつまのキモニテアリシ句とモキモ
トトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトト
セキモヤクモチキモル端とテマツシセモムケーハ
カクモテ右法の法にトナリト彼ノ種類の實制
ムトモト化行ムムケーハ安謙とトトモモモモモ
トモモモモモモモモモモモモモモモモモモモ

○名取と新の發句せ事

「」和モテ撰集する新とよびあれハ新別

さすとありて連歌もと名とせりへやせ俳諧
うまとほど新の名句をもぐくの用すて
にまの部をとひ世間とよー。今梓もとて
名所と新の名句を一句とも所の名とせり
きの名の候とよーあらゆく畜生と慈心
ととひ等は性かみやくやうあるまーを
まゆのせり

あくよろと詠すく一筋え片く
かくも下れされとひの浦山の婆様とほがを
まのむりともむらへやうわづら武陵より

伊賀よりゆうそく馬の名輪うちがりて
からちあくへねつま坂と彦馬哉

い時もろばれのくせ前のくせ牛もあるせ
てうながぬ服もありてむしろの連歌
よへらすやせ獻ひばりりむ名所の新いかく
もとそひふれおありひの源氏すじて
あくにまくとひはりて

かくはす角ぬりとけよ汝か
はくとお子ようの豪傑の西園とあひいよ
源氏よまくひまくわらわとよし俳諧の名のと

とほへかくアサヒの牛も高きをかま
次第あり。其用よりてあれど乾辟
の事も各取てはあつや。さあま
あまうるゝ乃はアミヌアツキを懷の詩毫

中へや様子をみる様の面

け句ちみゆくよ迎年のことらまわすかうむ様
歳旦の詠あれいとぞ新所事もじ或ひ
度未格ワやふクモトもれハ新所とし新所だ
ソムワヤモト格ヒ今的新制表うつすと今
の御詔の名向まくよてこそ也

蓮二云けほのわいと馬の類説し相あ
つて先師の遺稿も甚はれども其傳め大和
り御、さうやうして軍書、さうかう書ふと子
句と主附のとりよ敷陳ありと殊の如く
故焉と爲士芳卿の今す對一ノ件よ一略の
件ありと見えむをへばそぞとくに著せんと
はくまうをゆくよむとおこうやせらひあひ
ちうととく家内の人らと會すとゆる事有
きんと跡と仰ともちたるをあらんとて是仰
げ新と云ふと、詳より祖あるの詞と稱せ

寫すと書きとおもふへく芳艸草書とおもふ
へりをじうへうへにけらるの名とわせへるよ
一雙の腕力を抜きて所才のえむせり
へくれと校者のねうるへうらげばせやも
新角も新角も先師の遺稿もあきわゆ
まご教えや文殊のらいまや是を據る
うきらみのさくや憲の山に二句とがまみをせ
うそ石歌の撰集にはさく新しく部とされ
へうふ草から天の橋をの名はあくまびと見
とれあうせほ草から天の名せひとも

雖中と謙語とあともせば足るから、
のまよとひむおめ局敵とつらさんがあ
くま算はんを部あらう。満まつ井
もあそび。棉車みとまよと続と繋のこを見
けぬ。あいぢを察とあらう。
先師の句あり後へ傳説。寒とあらう。秋
作あそび算の部えとちと算よあらう。
えわと詠説をせゆる。一おもく新え部
のまよひとねく。もる雪もとくつてもえすや
げりと初のと詠あらう。うどねよあらうと

トモのとまとく作の形容あらへともせ
よ御の対談あつて新郎の一格ともぞも
あらに対て永のわじあし湖南の新郎山
余あつて七角や一子のひとうほくとふ
名前ありも財のほりらく比翁門の能事
かくは新郎より阿モヒ久とて新郎
コモモモモモ服とほげて四手格子もよ一
ちられとねゐの腰後よりうりていとやか新製
あれへを駿とするよにあらんをとて新郎

対ほどり今日の新郎とらさんとて草の席
うりてひづけ新郎もやあら一モアモヤ▲に接
まことに先師の役は新郎もよまよしとく
おわづの議論もわゆろけよ名よあは長良の
特川官とてにまの新郎とよ集とえくゆ
駿與ハ新の新郎とよひとくわくよ
うむくよまよせの新のよせ蓬二もかくも
ばれと角いざりげきよ新の新郎とよ新郎
新郎とよきとよよはとよかくあるよて新
よあらとかくりとくよにまの駿與も

ハ新のがよ歌名あしにまよ・あまとれ音可
と服よ起立の二格とい用ありこそ・縫と縫
と縫て口と縫ひれへ領子とまつまつ
の向よあうてふとせよ新おの新あんと一
の裏詠じらとすうかくいふて浦の草も
は服の縫も育ぬちゆの奥と争ひてす
ツモミと服のばたあんうらとれひばる
投毛も服のばたあんうらとれひばる
あすすとどめうけと等すとすとあわむ
今此元祖よふと彼つよ謡誦并北神ノカミも

みわづの名目ともあくもと一そりやあそび
と和音せ公論あれりや

○四季の名類化事

中古よりて季の名寄をあくむれ嘆竹とやにて
も書けやと用おそれともお用くとあくの音用
コト通用あくねあく角カツされは禁中の行事
よりて季の名をう論して神社仲間の行法し
まほ本を歎の名類ノカミとぞと嘆竹とよもや
あくれとよ嘆竹と例よ御儀の用ちらうと連寄

の附合と縫とてつひうけらるすの用とある
物名もあまことあれひ今を能谱は用あまくわと
時代の用捨つやうを(まつりせけあつ)けまと
古今論あるゆとあけて今稱のるまとが
一也称くと称けよよ達の人あつてけつよ
名れと凡例とあらむ月えりうり十二月は晴日
また彼つゝ嘘竹と用がつて季細めす同す
あらわとせらうけの製えまうふと或甚る
と秋冬と二季の間よやすくある地ハ多き
と角くしナキと加へてそれと今季の加減と

ソレ取も鉢裏とひだとつひせ良客と服部とつ
あとされと今季の儀からとつひ取も新萬喜
袖とあらとて時きとまことにあらハそれと今季
の貴族とつひ取も方おのせく用とねてつひまの
有用とみるまれと今季の蓄用とつひ年竟と
新故のきくひすて例の古木とわくとくと
あれと温故知新とやつよ一まほらくとよ
連手のぬおづり兼載京祇の挂ひうぢで
はつて紹巴のみ瓦ケ除あと墨雪とあり先
まアモとほくまうも月と耳ふわゆかん

スチ至一斬の所マツシとあひて一矢一石通の所マツシとす
何の爲マサニとはうあん何の向マキホウアヘン裏と
一部の凡例マツシとある一マツシセニシモテヒテの跡と
さもまと能活マツシハ例の事話マツシアリトヨリモテナシモ付
の事説マツシト窓マツシヒテセスミシム人の対談マツシトすモ
モ自マツシく此用と達マツシモマツシセセ

○春マツシ之部

節饗マツシ名ハ佳節マツシノ節饗禮マツシナリけ故マツシヨ月マツシ初饗

ヨリ節事氏マツシ人マツシ節饗マツシ字マツシ名各マツシ俗マツシ習

ナリ或マツシハ二マツシ節ト云マツシ詞マツシハ袴マツシ肩衣マツシノ威儀マツシラ止マツシテ
臨時マツシノ遊マツシラ云マツシヘリトソ或マツシハ朝マツシねト云マツシ詞マツシニ封マツシノ
人マツシハ節マツシノ詞マツシト成マツシルマツシ等マツシノ俗習マツシラモ知マツシナリ本
ヨリ俳諧マツシノ曲法マツシナル諸國マツシノ俗諺マツシラ知マツシ尽マツシスマツシレ

終雪マツシ冬マツシト云マツシヘリ〇今接マツシスニ終雪マツシハ冬マツシニ用マツシキ所以
ナレ雪マツシノ班マツシ十マツシ形容マツシハ初雪マツシヒ云マツシイ厚雪マツシヒ云マツシハシ
春マツシノ雪マツシノ平白マツシナラシモ日影マツシニ散マツシリテ終雪マツシヒ云マツシモ
寒マツシ氣マツシノ沈和マツシナル故マツシナハ終雪マツシハ決マツシレテ夫日マツシト定マツシレ
此等マツシハ例マツシノ加減マツシ比例マツシノ當用マツシ庄云マツシ一マツシナリ

雪解 サ詞ハ古キヨリ解ルモ消ルモ春ト成セト雪
消テ凡消カルは朝夕ノ白ニ結ヒ先足ノ陽ニ
結ヌラシ頑ニ春ト定メハ冬ニ用キ詞ナクテ附合
ノ害ト成ル時アラン度ニハ解ルヲ春ト成シ消ルヲ
冬ト成ス時ハ消ルハ物ニ敵シテ消ヘ解ルハ我ト解
ル故ニ冬ノ春ノ道理ハ明カニ詞ニ用ノ自在ヲ
得テ此等ヲ當用ノ勘トヤ云ハシ去ト冬ノ郊
ニハ斯ルニ及ハス

陽冬 此名ハ古式ヨリ新トアリテ諸抄ニ色々ノ説アリト
燃ルト詞ラ添ス氏味レテ春ト定キナリ鮮鷗

稻妻ノ説ハ連辛ノ用ニシテ 蜻蛉ノ説ハ鷦子ノ
沙汰ニヤ○今拵スルニ物ノ散回ハ殿羽臂ノ二字ヲ用
テ同訓別用ト成ス キナリ 鶯羽ハ木ノ張ノ鷀羽ヲ伝
羽ハアヒヘノ四各語ナリ或ハ耻羽ハジロト云類ナリ卷
ハ散回モ群尽モ散乱ノ助詔ニシテ和漢ノ通用
トハ世等ノ厚ナリ或ハ在子ノ野專遊弁アリテ
遊弁モ陽冬モ同意ノ説アリト漢詔ノ游弁ハ倭
詔ノ用ニ非ス增テ野馬ヲ以テ野集ノ説ハ何ノ習
ニヤ論スル足ラス或ハ斜游アシユトハ湯桶訓ニシテ和訓
モ例ノ覓東十ク斜游アシユトハ連歌ノ詞ニテ何レモ

俳諺ノ用ニ非ス去トツレシゆと假名ニモテハ指合ノ替ニモ用キヤ如きをろふニテハ海キ事也

海苔口 竹名ハ故實ナリ 櫻海苔口 甲 海苔口 海髮タマ 薩摩

海松 松ハ但其夏ナリトツ然ニ雪海苔口ト云物アリテ 例ノ如減ヨリ冬ト成セル其故ハ又ノ部ニ見ルレ

葦類 竹名ハ俗習ナリ 菖蒲 或ハ苔也忽也云イ 蒿 或ハ角藻也忽也根除ハ但冬ニレテ 東詞ナリ

鶴合 古抄ニ雜ノ說アレトウソ古抄ハ渡鳥ミタレト琴弾也 決シテ春ニ定キ 譽 嘴脣詞ラ添スニテ春ナリ

結花郭公

古式ニ郭公ノ事ハ花ニ結テモ嘗ニ結テモ甘美ナ

トムリ〇今按スニ漢賦ノ詩ハ杜鵑氏寫體
ニ云テ何モ莫春ノ景物ナレハ辛ニ甘ノ例ヲ假リテ
昌黎春日ノ用ト成スキヤ本ヨリ首尾第二結ハ、味ニテ
春ト定一レ此式ハ例ノ如減ナリ

木地短綠

竹式ハ新撰ナリ然レハ曰極ラ寔ト成シ極開ラ
冬ト成シ今ノ短綠ラ春ト成セレハ朝矣湯ハ
朝良ノ仰ラ假テ秋ノ用ト成スキヤ奉人ノ家ニ尋

○寔之部

若葉 古木ニ木ノ若葉ハ廿夏ト成レヨリノ若葉ハ春ト
成レヨリ青葉ハ總テ新ト成セルをナリ然レラ或折
六花ト若葉ノニ財ニ若葉ニ花ヲ結テハ春氏云イ
夏氏云ル何故ニ次ナラヌヤ○今按スニ月花ハ凡雅
一毫ノ飾ナレハ跨タル物ハ加減シテ四季ヲ自由ニ配ニ
ハ若葉ニ花ヲ結テハ決レテ夏ト定シ○獨接スニ
此配ハ花ハ春ナリ葉ハ廿夏ナリ實ハ本ヨリ秋ナラ
其葉ニ若ノ一子ラ結テ若葉ラ廿夏ト成セルヨリ
若芽ノ春ナル道理ヲモ知レナレハ花ハ春廿夏ニ
跨テ花ニ郭ムラ結タルトハ入遠タル仰ニ

ノ加減ノ棲度トハムキナリ

残花

此詞ニ古今ノ論アリ然レヨリ張字ハ廿季ヨリ
生季ニ残子ハ張ト云ル道理ナレ花ハ本ヨリ

春ニ決レテ残ハ廿夏ト定シ惣レテ残葉残葉
ノ類モ古オハ一樣ナラヌ故ニ十只八十色ニ竟ニ
百セニ論ノ勘ル時ナレ壁言ハ残葉ハ重陽ニ残ル
毛残葉ト何ニ残ヘキヤ残字ハ總テ其季まノ次ニ
取りテ此論ヲ張字ノ例トスレ秋冬ニ即ニハ舉ルニ
牡丹杜若 此ニ名ハ和漢ノ遠アリテ詩ハ牡丹ヲ春日ト成
乃父 し歌ニ杜若ヲ春日ト成セレト中古ニ詠諧ノ如減

ヨリニ名ヲ其ニ用エニ初夏ニ花ノサナキ故トフ

松竹落葉 古村ニ松竹ノ落葉ハ新ナリ常盤木ノ落葉

ハ夏ナリト云ヘト松竹ハ荷ニ常盤木ナシマ山館

向情ニ殊ニ面白キ物ナリニ景ハ決シテ夏ト定ムレ
去レト落ルトハ詩ノ詞ニテ散ルトハ大和ノ凡雅ナリ辟言六
桐葉ノ里ク落テ彼ハ散ル姿ニ非ス多ニ空情ノ論ヲ
知ラハ千式万法モ多ニ明ナルレ

水芙蓉 世名ハ新撰ナリ芙蓉ハ和漢氏ニ秋ニ節
入メレト水芙蓉ト云フ時ハ寢ニ蓮一名ト
ワ然レハ体ニハ和ケテ也芙蓉ト續ヌヒ芙名不永

ラ結えルカ散ルト云フ詞ヲ添テハ決シテ宜ニ用エナリ
秋ノ芙蓉ハ陸ニ咲テ凋テ散ラヌ物ナリナリ此觀
ラ句作ノ凡例ト成スキナリ

老葦

竹ホハ全ウ新撰ナリ然レモ老葦トハ本ヨリ

溪家ノ詩ニ出テ或ハ狂葦ニ乱葦ニ總ニ
暮春ノ物ナレト例ニ今ホハ加減ヨリ残葦ハ勿論
ニテ老葦モ夏ノ名ト成サハ葦ニ老ノ感情アリ
凡雅ハ例ノ麻敷味ト云ヒ此名ハ更譏ニ據ルキナリ
葦附子 竹ホハ例ノ當用ナリ○今梅マニ首子ハ春

至ノ比ニ鳴習フ故ニ其子ニ鳴モノヲ結テ久々季トハ成セリナリ爰レハ廿夏ハ向習ミト或ハ引鳥ノ親ニ附ケ或ハ苗ラムテ引音ラ教ヘ藝古ハ廿夏ノ向ナレハ附子ハ決シテ廿夏トニイ苗ラ結テモ廿夏ト知レ月星日カラト引声ヲ取上ノ管トセリ

鳥巢 即金ニハ鷦ト都鳥トヲ加テ水鳥ハ總テ冬モナト
此ニ鳥ハ歌道ノ御古ナレハ夏ニ詠ナスト高捨テ例ノ子細モナレ新ナリト云ヘリ○今接スルニ都鳥ハ指テ能詰ノ用ニ非ス増テ御古ナレハ論ニ及ハス鷦ト云ナ跡等ト云ルハ本ヨリ水鳥ノ用アレハ空ホラ結テハ

冥トキスレ先ニニ鳥ノ浮掌ト云ハ古キニ新ト成セリ夏ハ水中ノ芦ニ巢ラ獨メハ少ノ増減浮沉テ四季モ其後ニ捨置ク故ニ道理ヲ附テ新トハ成セリト鳥右巢ハ總テ去物ミテ其巢ラ掛ル時ハ廿夏ナレハ浮掌ハ決シテ廿夏ト定キヤ掌ニ用ナキハ向作ニ依ルニレ鳥ノ別名ハ又々部ニ論アリ

翡翠 此鳥ハ詩ニ名アリテ古抄ハ渡鳥ミ入タート文ノ名川ニ木陰ヲ傳テ決シテ廿夏ナシト云シ川蟬トハ倭名ナリ
川木陰ヲ傳テ決シテ廿夏ナシト云シ川蟬トハ倭名ノ時ニ魚ノ新敷ラ御スレハ決シテ極暑ノ名前
沖鮑 竹名ハ俗習ナリ或ハ海邊ノ別名ト或ハ船遊

ニテハ等ラ例ノ音韻訛ト云(キナリ)

波汗ハシマハニヨハ幸家ノ赤月ニ多スハ秋ノ季子ト麻セヒハ
察スルニ既ニ字子ノ惑ニヤ夏々ハ涼ヲ好ミ秋ヘ冷
ラ西ム天地自然ノ道理ニシテ此等ヘ対象ト決シ
物テ古今ノ遠トハ天理ノ次チ情ラ論スシテ文字
言語ノ名ラ認ル故ナリ是ラ千式ノ凡例ト知
ナリ

○秋之部

花鳥ハナトリ佛金ニ正花ナリ春ナリ細ニ穿方殿壁スヘハ種ニ
ノ至屈アレト此分ニテ置カ能ナリト云(リ如何アル

秘古又ミヤ知ラス○今梅スルニ花壇モ花鳥モ決レテ
秋ニ定ニキナリ花園ト云ハ竹花ニ似ヌシ匠園トハ
仰向キ鳥トハ俯向ク多ラ能詣ノ次ナト云テ種々
ノ理屈ハ今ノ用ニ非ス等ラヘキノ有用ト知レ
桂花カツラ名ハ今ノ音用ナリ古ホニ春季子ノ説モアレド
地下ノ桂ハ花角ナリ和歌三月充ラ讀タレ
例レテ月ノ異名ト成レ秋季子ト定ルハ勿論ニテ
四季ノ詞ラ結フ時ハ四季ノ月ニ用ギナリ然レハ
有明既望ノ名ニ例レテ日モ星モニ向去ニラ植物
ニモニ向去ニキナリ

真龍橋古抄ニ生類ニ非スト、鳴吹此詞ハ種々ノ説アリト

加荷鳥ニテ有去キ、力吹キラ吹テ鳴ノ真似也

紅葉散此詞ハ古式ヨリ日_{カツキ}散ラ秋トムイ散トハカリラ

花ノ散ルモ春ナレハ紅葉ノ散ルモ秋ノ若ナリ增テ

冬散ル木葉トムイテ枯テ色ナキラ用トセリ世等

ラ古今ノ用捨ミシテ例ノ且_{マニ}ニ及_シ同敷ナリ

柏散此柏ハ馬傘ニ詠アリテ論語ノ松柏ラ證文シ

柏竟ハ新ト成セレニ夏ニ散ニ字ラ結テハ決メ

秋ト定_{マニ}キナリ○今按スルニ論語ノ松柏ハ松ト柏ト

常盤木ニヤ然ルラ六書正誦ニ柏字ハ柏字ノ俗書
ナウトヤ去ルラ大和ノ俗習ニ柏ラカヤト訓レ柏_トト訓シテ此類ノ正俗ハ數多タナレト知テ誤ニ從フラ
國_カノ故寔トハ云_リ去ナカラ爾報ノ註ニ樞_ト有義
實而如柏トマレハ倭ニモ媚テハ樞字ラモ用ニ樞ト
柏トハ異字同訓トムシ或ハ馬傘ノ訛ニ紅葉セ
故ニト云ニレト桐葉ハ紅葉セ子氏和漢通用ノ秋季
ナリ惣シテ我家ノ真名遣ハ柏字俗字ナニ諭
ヨリ古今ノ西用モ正誦ニ様モ能諾ヘ例ノ俗習ニ
從テ今日ノ用ラ達ス_{キナリ}

椎榔柏 御傘ノ椎下ニ紅葉ヤ又木ナレモ椎ヨヤリモ秋
ナリ或ハ子葉モ丹木モ秋ナリトムテ秋ニ用ヒ子細
ラ叙セス然レバ柏トハ入達テ彼ヲ新トシ是ラ秋ト心
百サノ志トハ所謂ナリ○今按スルニ椎モ榔モ柏栗ノ
名類ハ全ク紅葉ノ所也ニ非スユカルトカ拾フトカ
宣ラ結テ秋ナルラ蓮宣ラモ夏ナリトムレハ古抄ハ
如何トモ其故ラ辨ヘス

新薦高麥 セキハ例貢散ナリ奈何トナレハ刈ハ冬ニシテ食フハ秋ナレ前後ノ働ラ賞貢テナリ去レハ茶キラ摘ムハ春ニシテ新薦ハ頃次ニ甘夏ト成セル遲速

ノ用ヲ知ル時ハれナノ宣給フ不時ノ誠モ且ハ時其物
ノ程ラ知テ分外ノ五奇ソ好サレトフ

初鴨 竹名ハ全ク新撰ナリ或ハ貢散ニ加減トモエハノ ○今梅スルニ奉膳ホミモ一ト移ト並十カラ賞貢スル
所ハ秋冬ノ差別ドリ去尾見向ノ姿表情ラ論ヨハ初カタ
ト云ハ凡雅ラ思ヒ初鴨ト云ハ风味ラ思フ室ニラ天眼ニ
天耳ニ云ヘリ辭言ハ初カタト音ニ喚ヒ风味ラ先ニ思フキヤ
鴨ノ冬ナルハ勿論ミシテ初カタ字ラ添テ秋ト成スケン

野宮別 竹式ハ禁中ノ行事ニテ古式ニ竹類ハ數多シナレト多 連歌角用ニテ俳諧ノ平語ニ無用ナラン达ニ俳諧

ハ下手上達ノ道ナレハ言ヌヘ等ノ一名ヲ舉テ云家
歟上ノ例ト度サハ四季ニ^ノ變ノ名ヲ^{スル}シテ作詩
曲節ニ用ヨトナリ去ヘハ野宮^ハ活潑ト賀サレトニ在リテ
伴勢ノ齊官^ニ移リ玉フ^ラ野宮^ノ別トム^リト^ト去ヘ
囂^ハ旅^ミ哀傷^モ非^ス博^テ憲無常^ニモ非^テ哀
ナル汝^古モタタケ^ハナリ

○冬之部

枯尾花 此名ハ古今ニ論アリテ秋に云イヌ^ニ云ヘト枯^ハ字ナラ
結^テハ冬^ト定^シ其故ハ名^ニ木ノ枯^ルラ冬^ト成^シ

名^ニ木ノ散^ルラ秋ト成^{セル}散^ルハ色アリテ枯^ルハ色ナキ
故ナリ然^ヒハ名^ニ草ニ其例ニシテ枯尾花^ハ決シテ冬
残葉 此^ハ諸抄ニ論アリテ佛金^ニ六重陽^ニ残^リテ秋
ナリト云^一レト桃モ草モ其類^ニ非^ス然^ニラ和歌
ノ公亦二十日五日^ニテ残葉^ハ寧ト云^レハ宣^ハ字
ニ及^ハスシテ決シテ冬^ト定^シ此^等ヲ加減^ノ用ト云
ハシ^ハ残葉ハ終^テ残葉^ノ例ニ效^シ

乍鶴 此^キハ全^ク當用ナリ古折^ミ秋ニシテ廬^ハ部
ニ入^タレト山雀^日雀^ノ類^ニハ非^ラア^ト乍^ミ鶴^ノニ
物^ニ連^ニス^ニ民^ニ家^ノ軒^ニ駆^テ馬^ニ防^ラ傳^ニ水^{相^ニ}

避ニキアノ清ニタルハ殊更ニ寒ニ増テ春日帰ニ次モ
モ見ニ子ハ決レテ冬ミト定ニシサ等ヲ次サ情ノ例ト云シ
木兔 木兔モ例ノ新撰ナリ古抄ハ秋ノ部ニ入タレト復鳥
ニモ非ス色寫ニモ非ス増テ鳴^フ音ノ物^{人マキ}寫ハ寒ニラ曆
一正故ニトヤ然ニ二季ノ加減ト云^フ夜鳴ク鳥ノ書用ト
云イ決レテ冬ミト定ニシ或ハ鳥キモ部類ナカラ新ト感セル
ニ用アリテ世等ハ古抄ノ文覚ト称スニレ

鶴
此鳥ハ倭名ノ火燒ナリ然ル古抄ニハ渡鳥ノ部ニキ
ト其名モ其吉ノモ朝霜ノ氣製也ト云イ秋ニ小雀
ノ多シニハ冬ニシニ郊ニ跨テ而名モ加減ト云^{キナリ}

鳩
此鳥モ論セハ新撰ナリ赤金ニ鷹下ニ鳩ト都鳥トヲ
加ヘテ新オニ新ト云ニ爾歌道ノ秘良ナリト吉四捨テ例ニ
其故ラ曉サ子ハ今日ノ用ニ立雞レ○人ノ梅スニ路鳥モ鳩
モ次ニ宵及冬ニノ差別モ並レハ早ホラ結スハ新トモ云^キケ
レト鳩ハ鳴声モ寒氣ニテ俗語ニ搔^{カニシカ}井モ云フナレ
ハ能詣ニ各目ノ自在ラ称レテ冬ニ用アラハ冬ニ
用^{キヤ然ニ}ハ路鳩^鷦ノ部類ニ勝リテ例ノ新ト成リ
冬季ト成リテ附合ノ當用ト云^{キナリ}

鳩子 此名ハ古抄ヨリ歸^シ字ラ結テ冬ミト成セレトモ
鳩子トハ名目モ長ケレハ啼^シ字ナクモ冬ミト定

レ彼ハ冬至ノヒヨリ鳴習フ故ニ其子ニ冬ニ用
ハナリ増チ草ノ世鳴ト云ハ子ニモ及向敷ナリ
尾越鴨 竹名ハ俗習ナリ鴨ハ往來ノ道ヲ定テ山尾崎
ヲ越ル故ニトワ然レハ初鴨ヲ秋ト成し鴨ト
ヲ冬ト成セル名ハ殊ニ能詣ノ用ト云レ

綿入棉打 石抄ニ綿ノ皮ハ分明ナラス或ハ直毛綿モ木棉モ
本ヨリ新ニレテ綿入ト綿抜ノ對レハ入字ヲ添テハ
冬ト定一シ或ハ棉カラ秋ト云レト綿ヲハ摘ト云イ
棉ヲハ打ト云フ打ハ木棉ニレテ決レテ冬ト定一レ

棉取新棉ノ外ヘ秋ニ非入或ハ綿帽子ハ衣類ニ
非スト云イ綿ニ海鼠腸ラ婦フノ類ハ古今ノ遙
ナレハ論ニカヌハス然レラ綿ト木棉トハ附テモ苦
カラスト云テ蚕綿ト木棉トノ款式アレト綿ト棉
トハ莫堅也三テ音訓压ニ替ラヌラ何故ニ附向ラ
蛹又ヤ古抄ニハ冊類アリテ皆々論スルニ暇アラス
爰ニ紙綿ノ一名ヲ舉テ一方は凡例ト成サハ且ハ外ハ
推レテ知キ矣ナリ

サ路塔 犹名ハ古來コト論アリテ歎冬ニ山サ路ニ
空丸タード和歌ノ題ニハ山吹ニ用事キニハ便

テ大和ノ故寔トハ成レリ然レハ中古ノ式目ハ路塔
モ路花モ同ク春ニ用タレト其名ハ例ノ音具習
村消ノ雪ニ結トモ路塔ハ冬モト定シ然レトモ
路花ハ漢ニ賣鴨カ春有雪ノ詩ヨリ春日ト云ハシ
モ宣ナレト其名ハ指テ能諳ノ用ナシ路草ノ祖

春ニレテ一物ニ用ノ例ト云キナリ

冬丸 竹名ハ能諳ノ自在ニレテ冬丸ト音ニ喰ニ或ハ
カモフリト訓ニ喰テ中古ハ總テ秋季子ト成セリ
去レト幸ニ冬ノニ子ヨリ霜ヲ待テ賞スル物ナレハ
西丸ラ秋トセル加減ヨリ冬丸ラ冬モト定キナリ

雪海云口 竹名ハ俗習ニレテ或ハ加減ト云キトクノ物ハ
北越ノ名産ニレテ海邊ノ岩向ニ降積久
ル雪ラ波ノ底浸入柏子ニテ凝テ海云口ハ成レリ
トフ然ニ雪ラ里ト訓セレハ色ラ青ト云ル美訓
ナラシ○今ノ按スルニ海云口ノ名ハ春冥ト復又レハ
雪海云口ラ以テ冬モト成サハ例ノ實議ニ及ハスシテ
其等ラ加減ノ當用ト云レ

大根引 竹詞ハ冬モ當用ナリ大根ト略シテ音詰ニ
讀ヘシ京家ノ大根引ニ效フ一カラス牛房
モ同レ名數ナカラ引ト云スシテ塙ト云フ其名

ハ秋ト知一キナリ。今梅スルニ作詣式同ハ新式ニ據
ラス古村ラ逃ハス今ノ日ノ世法ニ遠シハ其ハ座ニ膾ミ
其時ニ從ヒ其故ラ諭レ其厚ヲ明メテ自己
ノ理屈ラ完モサラシハ其ハ町ラ一世ノ血氣議ト知リ
其ハ町ラ百世ノ明監ト知一キナリ

車夫ニ云け式の迄用ヒ始ヨ節食の乞ヨ
終ヨ大振りの迄用ヨクガトモ口才余條モ
一或ハ運氣の有用アリ詣瀬の迄用ヤ
一或ハ古今の遠因トテソソリ或ハキモ節の
加減ヒドトキヨ早竟ヒケホドモトキヨ千式

万法の凡例ナシニヨモアリヒ謂能智の微中
ヒ失ソヒト一半天万通の様、要トケホの序詞
ヨツヨヨモ達の人ヒえヒテモモトク四字ヨの
名れヒアリナシヒ詣瀬の誤不誤ヒ詣瀬の
用サリ用ヒミムケテケホヒ格例ヒテ自己のみヒ
ヒシロヨモハニモ瓦世の惑ヒヒトモヒテ

○ 作詣ノ假名はシヒ事

大和ノ假名遣ヒヨリヒ定永ヒのね取
ヒラ作ヨヒモハニモ瓦世の惑ヒヒトモヒテ

古文真賞卷三

字があるよ。天文の時代板りあらざれあると
せぐ。ひまねて或は故室をすよわあ。アホ。
トモトモテキトモ。撥字ともと氣の假名
トモトモ。庵字すい類字すい音ともあれ訓
あ。まやまえり。何故よ揃れ。わざなせ古
ちりやま書き。もと。あくふじと
歌書のわね。例め。あくふじ故室
もや。歌を口傳とよねあう。やまとへわ
ちよ。あくふじ法といひ。ハホ。ハ
トモ。通音入。もとと。ふの字あられ

真名とせ配するにあらわるある一もと
へあつてまたもとて假名ハやよりやをあれ
とひよと假名書の狂文とアラタニテ書法
の字形かげやれいあはよさまよ。とかまくや
をもとてはげかげかげかげかげか
ぬあらよ似もしにあれ。ヨ假名ハたまこと
の口挿ど。様。却一きやせ或ら文句もやうやくもと
ち一トあるやよ。トヘ信イコロヤ一或も言語よゆよ
アモカレヘヤ。トアラヒ縛。コロヤ一わべーとありよ
の信繩。カヌ。けあれも生身。アモカレヘのうわべ

字形のくじらと考へて從むるやん丈うと言ひ
に同訓異用の假名遣あらう上ヨ又ハ中ヨ考へ
トすもかと云ふやう假名遣のちよ東
いひみいねとやはえづちのれすトシモ
新制のくらせや^フ假名遣ひゆほのゆほのゆ
もむだのをやあまくおももくううあらうあへす
の歸りあんよ已うもくぬと耻^フ人ゆきぬ
とがふすれお^フほとく^フ例め衆譲^フ
例の明筆^フかくも^フまつも^フもやう^フハ^フまの法
ト^フてあるやまとわ^フきやう^フは^フ

い　いまく
いふ一

鯛 鯉 類
魚 素 鮑 鰐

い　い
いふ

鹽

或トモアシハ器の附也

紅

スミサルシ

住居

テラモアキスミドリ

又

トエニ廊子也

眠

ホムリモアリ書也

侍

タマツアリ

絶縁

ミタリモアリ也

手詰

モウモウモアリ也

死

タリモアリ

死

モウモウモアリ也

いふ

モウモウモアリ也

死

モウモウモアリ也

直

タリモアリ也

死

モウモウモアリ也

音画

モウモウモアリ也

死

モウモウモアリ也

唯牙

モウモウモアリ也

死

モウモウモアリ也

齒音

モウモウモアリ也

死

モウモウモアリ也

助筋

モウモウモアリ也

死

モウモウモアリ也

和訓

モウモウモアリ也

死

モウモウモアリ也

いふ

モウモウモアリ也

死

モウモウモアリ也

とすと假名より又句と言語とに勧く
勤る訣ありて物名をまんまと勧ね
へ鯛鰐のあともひの字をもす。養鰐の
れりおありく物名あれども假名よりを
次もちとづはありて矣もあふいとぢ
（ま）とあるまで日就とめくるね。よこひと
辰巳の房もあらり龍の國みかの假名
あれといふ。と音寫の歌もあらり但つ
ひもそく歌書すよ。第へとおもりませ
みゆゑを古ねふやるとあれどわがの

あれわうそのかへやましに假名よかくと
勤る訣ありの事も教みあれど言語を勧き
文句を高めさせきとくましめるともあひ。
のことをもと筆にけ角よもよもせ次よ。む
以下の五品ハ古書の假名ほひと散在され
ほひとおもえ句と言語とに事へ勧く
と勧る訣と或も畜生と畜生とぞふ後と
上中下と用ひと或も軒雀と名ふ後と
或も口傳と故実とあられ假名ほひ

の半竟と和歌の撰集と武家の軍書
も假名と真名とせらるり假名
はくまとオトコトよると其書の用
あれへやくゆるしも讀やまんふあり
あらと今おれありと万葉假名と
かをくらひくちも直名とむちぬ
エニテニテアモレハあとものうだ
とまよはて月狼と夜声の感作あれ
ハトキルナヒハ洞しきわまれどはと
されど能書の家よまれて屏に障子

の日流すあへおゆきつゝおなう面に
けとすの本原と撰集つゝくまう
せを活と屏風よろづまなせ伴とけ式
の叶障うち。圓角の二紋よ軽重とアド
むれと千文とよし前よあまくかよじふと
せくよしかなともあくと多波の
よとひあんちれハ再撰の要とアド假名
アモレと用うよ一發百中の的諾と焉也
通とす。辨ともす。
○不直ふす婉をさうせまひね實也

東坡集

卷之七

お在云ひてまほ声詞。めう。捨てよと
きく。ちゆの假名あうト。けん
も。わのまわ。けうひ。う。も。い
ゆ。と。き。う。よ。う。あ。そ。り。わ.
き。け。う。る。れ。き。か。く。ね。ふ。じ。る。よ。と。り。う
せ。よ。と。き。を。仰。あ。も。草。ト。か。五。手。書。う。よ。再。撰。セ
男。あ。こ。下。れ。か。う。
精。背。大。お。尾。あ。
女。よ。ん。あ。山。下。風。め。ぎ。う。
小。捕。小。ど。り。小。と。緒。と。

善ふれゆきと東流を詠めらるゝあ
詠れりと多くめぢりとちる也。因含ふる事よ
フ竪丁と仰らば通用せ

○ わ や 左 右 上と下に用ゆ
○ ノハ 同 中と下に用ゆ 之輪
○ ひまわり けれども右也

と中下に用ひとく。とある事に中下用ひ
ゆるもあられとあり。それめれもあられ
とと書て書ひとけよ。書を假名
とし或トするは、のれもまじて
アの字を用ひて東をア。ア。ア。ア。
あらんをすたとと字承る。され
と書はめくをりや假名のほきと
アあれひげかとけ側よち一トられとも
在ての假名はいよ。度もは。波さ。粟あは
録く。かれとひうちらねくも知く。ア。

○○○え

乞うてよあすあん前め嘗議^{イフク}一
消キル杖^{カツ}觀^{カウ}は甲^{カウ}枝のえのまと
更^{カアル}えゆふへの葉と^ハ和^ハす。室^ヤ

○互へ

声コ^モ指^{コス}卫^モ或^モ本^モ轟^ハす。ア^ト

東をええのすとむ^トト^ト論^トア^トて^ト字^ト
も^トト^トや^トト^ト用^トト^ト編^トえ^ト字^ト
二音與^トおな^ト也^ト編^トえ^トと^トア^トと^ト字^ト能^ト
と^トレ^ト表^トえ^トと^トア^ト字^ト訓^トや^ト或^ト君^トえ^ト
と^トよ^ト名^トあ^トと^トよ^ト字^ト呼^トて^ト實^ト字^トあ^トん

或とえのよと見ゆすとて詰えのえのよ
あらとつよ説わあれとえのよとえと割
きとくとあくわい細く細てる起と
こまくがむうより作是はま津にキ
の起とつよあくわい家の人もあ

つ
ち
とちとよ。アミ通スハトセモヤ

法師 ハツレアドハは也 鞠ナツ拾レツ
東菴を云假名ほひのアヒナ五條の御もま
あくまも下の五アナはよハ彼アハ船巴

のよぢとまくりて常用の假名と坊補に
くおさり一そく再擧のあやまちもあり
されやまの假名遣とよも後の人作
作すてはらの述とあくまこと云れ傳古
仰承する名とぞうて胸^{クニ}と補ふもと門の
任やももと自との服とむてまとひ新歎
れ子の生詠とよとし取すとよとし持す
とよとよと各よわざとんべ端よりと
あくまの假名ほひと號とことなと
あくまとて音符の假名ほひと號とことなと
あくまとて音符の假名ほひと號とことなと

蓮ニ云世ノ假名遣ノ事ノアリテ古事記
はシヒシトヨリシケテ新御文書
ルトシト俗名真名古モトモトアリテ大和詞
助語とやうけて能背の文章也キニ降ニ
アモトモトアリヘニ接モルヒケ邊鷦鷯と称す庵
の遺稿トドクテ彼ワニ五抄の一子モモト
え穂甲成の祐トモ伊賀北西齋庵トモツヤア
後稿裏の撰寫の店ノシニトモまつた文
稿トモツアリテナキ篇の並換アリトニ
前稿裏の真名文トモ幻住庵記トモツアリ

卷之三
楚楚の文論あり「も略云我が朝て俳諧
の文章と和歌運乎」云々ありて家ヨ一格
あんすと云ふは漫ヨハ四六の文ナアリ「指子
ハ詩ヨ情詩」アリモ「俳諧の平話アリ
例の有者各抄ちあんすとまとへぬ比類也」
形容ヨハ上を鶴鷺トシホウの羽の如く下を鷄鷹トニキの股
ト似テ鶴鷺の羽の如く下を鷄鷹の股
ト似テ鶴鷺の原中林ノの聲ある詞も
似テ鶴鷺の如く今ハ文論ト真名合トモ
返る返る歌の差分あれハキトモサヨメ同

ありよと假名とすて直名とすてとある
大和の文とつとも今論まる幻住庵の記したる
の詞とやりあつて假文ト走字すと云ふが云寒ハ
足松東南とすとせれの用とはをも
立黒に楚れとすよりも本の事練へ指とまとも
又は主とわとすとす而筋思と云ふ早計の
人れ悔あんばや奥のゐをとさゆれ
人ときむとすよ蹟と生とすとす者あれハ
今す假名直名とくとくおよひとわく
を一方三事の假名からへうむと我とすと

かとらとそとけたりとすと梓うちもわゆ
あととと越波のりとあとわと藍換と一せ
ト詩文の文章と論とく湖南と自ら解
とほとて百姓の文格と聖とくと
皇にわくと遺稿の大任うちこれらと文歌の
秘訓とよ全一とやけ稿のあけくあがれ
年ゑた月よ祖翁と新波とせと解
がハ武陵とあ一とく文章の文歌の文歌
の聖操とほと角とくとくしてよおぢよ
すあんと滅ねときたとあめかとくとく武陵

の右をのがれかとて口かの拵あらざることく
例のよき者かうすともさと無極もんじと
せんへうてせんへに書森よひうぢやうぢやう
すとと傳仰の遺書うすあうてその所どるの
はとほくえの才ふとほの奥、廣とほくと
遺稿とげ下せ密護あらんとやまくろくの
廣狹とほく仰詮と十大才子の接言えりう
ひろから傳書うす千二年の偏寔よせたまる
とと金とと貴書の虚実あらんと例のあられ
かそれまことに金本の角撰うすてと挿

はて対譜とまことらしやへ往後まことに假名
はいふとと和漢の助語せ通用とあらて假名
と直訳とすくとととととととととととととと
格とすくとひげよ大和詞と助語とまこと

貞吉オロヘニ終

